

エリカ (M) 「これから始まるのは、生ボイスドラマコーナーです！」

エリカ (M) 「どこかにある『カルモア学園』にノール先輩とわたし、候補生エリカが学生として潜入して、学園にはびこる悪臭の元を消臭して、世界から悪臭をなくすために戦うと言うお話です」

エリカ (M) 「タイトルは——『デオフェアリーノールと秘密の部室』」

エリカ (M) 「これは、愛と勇気と真実と消臭の物語である」

エリカ (M) 「出演…デオフェアリー・ノール、秋山えりか、スタッフ先輩、たけちゃん」

エリカ (M) 「脚本、上城友幸」

エリカ (M) 「では、物語……スタート!!」

一拍の間

ノール（M） 「『デオフェアリー・ノールと秘密の部屋』

スメル11『悪臭源！』」

一拍の間

ノール（M） 「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通のデオフェアリーなの！この世界から悪いにおいをなくすため、カルモア学園の学生になって、人間の世界を見守っているんだ」

SE…ノックの音。

SE…ガチャ！とドアが開く音。

エリカ 「おはようございます、お姉様！」

ノール（M）「この、ノールのことを『お姉様』と呼ぶ騒がしい子は、後輩のエリカ。実はデオファエアリー候補生なんだけど、ノールと一緒にカルモア学園で消臭の任務についているんだよね」

一拍の間

ノール「あれ？ えりは？」

エリカ「今日はお休みですって。宮崎に行くとかなんとか」

ノール「なに？ 夏休み？」

エリカ「なんか、チキン南蛮の食べ比べするって言ってました。

胸肉ともも肉、どっちがおいしいかって」

ノール「連続で食べれるボリュームじゃないよね、チキン南蛮!？」

エリカ「どげんかせんと、いかんですねえ」

ノール「せっかくなら白熊たべにすればいいのに、って田舎が

鹿児島のかみじょーが言ってた」

エリカ「隣の県とはいえ、遠いですよね、単純に」

一拍の間

ノール「それはそうと……じゃっじゃーん！」

エリカ「今週はどんな服装ですかね？」

ノール「今日は、ダメな人には見えない、オーバーオール！」

エリカ「なるほど、裸の上に直接オーバーオールとは、お姉様も

セクシーコマンドですね」

ノール「素肌の上にオーバーオールは、脇から思いっきり見える

よね!? ちゃんと下にキャミソール着てるからねっ！」

エリカ「だいたい、なんでオーバーオールなんですか？」

ノール「マリオとルイージの誕生日だから。ヒゲは無理だけど、

駄目な人には見えないキャスケットもセット」

エリカ「お姉様ちっちゃいから、気をつけないとエマニエル坊や

みたいになっちゃいますよね」

ノール「そんなことないよ！ むしろ、大人の魅力でエマニエル

夫人みたいだよ！」

エリカ「それは、どうかと……あと、某ボクシング漫画の、志那

虎一城（しなとら・かずき）の誕生日らしいですから、

リーゼントにすればバッチリでしたね、お姉様」

ノール「ローリングサンダー禁止！　っていうか、そういうネタ
のせいで昭和って言われるんだよ！」

一拍の間

エリカ「さて、今日はどこ行きますか？」

ノール「体育館の裏に行こうか」

エリカ「え？　最近、行きましたよね？」

ノール「じゃんっ！」

ノール「ダメな人には見えない、猫缶！」

エリカ「あく！　そういえば、体育館の裏に猫いましたね」

ノール「この前は逃げられたけど、今度は猫缶持ってきたから

大丈夫。ノールにまつしぐら」

エリカ「そうですか。もお、消臭する気はナッシング・アットオ
ールですね」

ノール「消臭する気はあるけど、アンモニアやつつけたの最近

だから。あのあたりは、きつと無臭」

エリカ「なるほど。悪臭を気にすることなく、泣き濡れて、ネコ
とたわむれようと言うことですね」

ノール「石川啄木は砂浜でネコと遊んでいないと思う」

SE…ガチャ、とドアが開く&閉まる音。

SE…歩く音 (F・O・)

エリカ「相変わらず、なにもないトコですね」

ノール「にゃんこどこだろ、にゃんこ」

エリカ「あ」

一拍の間

エリカ「お姉様、いましたよ。あそこにこの間の子猫が」
ノール「にゃんこ！（上にかぶせるように）」

SE: 駆け寄る音

ノール「アハハハハッ！ にゃんこかわいいー！ にゃんこかわ
いいーっ！（着ボイス口調で）」

エリカ「ほーら、きたぞー」

ノール「ほらほら、猫缶だよー！ おいでー」

ノール「ーあ」

SE: 子猫の鳴き声

ノール「きたきたー！ にゃんこかわいいー！」

エリカ「ひよつとして、わたしはお姉様が猫と遊んでる姿を、
つと見てなきやいけないんでしょうか？」

ノール「食べてる食べてる！ にゃんこはかわいいよおー」

エリカ「聞いてませんね、お姉様……ん？」

ノール「にゃんこ♪ にゃんこ♪」

エリカ「なんか……臭いですね」

ノール「……猫のトイレ砂の臭いかな？」

エリカ「いや、これは……アンモニアじゃないですか？」

ノール「どこかに猫トイレがあるんじゃないかな？」

エリカ「安心してますけど、悪臭じゃないですか？ 大丈夫
ですか？」

一拍の間

アン「ごめんね、お楽しみのと・こ・ろ☆」

SE..それっぽい登場SE

ノール「……………ボインのニオイがする！」
エリカ「え、ええっつ！？ うそおーっ!？」
アン「うふふ、ホント」

一拍の間

ノール「アンモニア——の、アン!？」
エリカ「だって……消臭しましたよね!? なんているんですか？」
アン「なんででしょうね？ ヒントは——にゃんこ☆」

一拍の間

ノール「アンモニア由来の悪臭はそこかしこにあるから——復活
したの？」

エリカ「猫トイレとか、ですか？」

アン「ご名答」

エリカ「でも……お姉様が『消した』のに」

一拍の間

アン「四天王クラスになるとね、色々できるのよ」

エリカ「あの世から戻ってくることも、ですか？」

アン「悪臭源があるなら、簡単にできるのよ」

ノール「おのれ、ボインめ〜！」

エリカ「いや、ボインは関係ないですよね、お姉様？」

アン「それに、悪臭の元はひとつじゃない。どこにでもありうるものなのよ」

アン「たとえば、トイレ——学校の中に、いくつあるのかしら？」

エリカ「——いっぱい、ありますね」

ノール「トイレだったらアンモニアだけじゃなく、スカトールも、硫化水素もたくさん……ってことになるよね」

一拍の間

アン「ひとが生活をする影に、わたしたち悪臭の元がある」
アン「——それを全部消すの？」
エリカ「臭いニオイは元から——って言っても、って話ですか」
アン「猫砂のアンモニアが嫌いから——猫ちゃんを消すの？」

SE…猫の鳴き声

ノール「そんなことできないよ！ ノネノールを消すのに、上城を消すって話でしょ!？」

エリカ「それは、検討に値する話ですね」

ノール「そっか、かみじょーは消しているんだ。じゃあ、別のたとえ話。たとえば汗臭さの元、ノルマル酪酸を消すために上城を消すって——あれ？」

エリカ「同じです、お姉様！ もお、とりあえず上城は消しておきましょう」

アン「それにね」

アン「悪臭成分といっても、少量ではいい香りになるものも

ある——スカトールや硫化水素みたいなね」

アン「それでも、容赦なく全て消し去るの？」

一拍の間

エリカ「消しましたよね、容赦なく」

ノール「あれは、不幸な事故だよ？」

エリカ「そうですね。『でおどあー！』って声が響き渡っていた
気もしますけど」

一拍の間

アン「悪臭と良い香りは、紙一重。というより、きわめて主観
的なもの」

アン「それなのに、消しちゃうのかしら？」

エリカ「まあ、トイレのニオイも、一部の紳士淑女の方々には

ごほうびですからね」

ノール「たとえそうでも、くさいものはくさいんだから！」

ノール「ボイン、覚悟っ！ 華麗に変身、でおど」

エリカ「お姉様、ストップ！」

一拍の間

バスメル「おお、ノールちゃん！」

ノール「げげっ!？」

エリカ「危なかった」

一拍の間

バスメル「こんなところで、偶然キミに会えるなんて……僕にも

来たみたいだ、ビッグウェーブが！」

一拍の間

ノール「パワーウェブでぶっ飛ばしてもいいんじゃないかな、

エリカ」

エリカ「むしろ、カイザーウェブにしたいところですね」

ノール（M）「そんなわけであ…（やる気なさそうに）」

ノール（M）「この、いきなりうっとうしい、キラキラ二枚目の

お兄ちゃんは『バスメル王子』」

ノール（M）「別にアラブかどこかの王子様ってワケじゃなくて、

ニックネームってヤツ？」

ノール（M）「なんでか知らないけど、わたしのことを妙に慕っ

ていて。何かというと、つきまとってクサイ台詞で口説

こうしてるんだけど。ノール、クサイ台詞って大の

苦手なんだよね」

一拍の間

ノール「ほら、王子。今日はせくしーだいなまいとな女の子がいるよ。そっちに行った方がいいんじゃないかな？」

バスメル「ボクにとって、女性は大きく分けて2種類しかない。

キミか、それ以外だ」

エリカ「ふわあ、すてきですねえ。そんなこといわれてみたい

ですう〜（えり口調）」

ノール「ホント、ひとごとだと思って好き勝手だよね、エリカっ

!？」

アン「じゃ、眼中にないアタシは帰るわね」

エリカ「あ」

ノール「ちよっと、そこのボイン！ 待ちなさい……っ！」

一拍の間

アン「ありがとうございます……王子様」

SE…携帯の着ボイス音

バスメル「……ああ、ドワンゴ・ドット・JPでダウンロード

販売している、ノールちゃんの着ボイスが」

ノール「はい、今週もたのしいたのしいステルス・マーケティング

グ・タイム〜！ ドワンゴ・ドット・JP取り放題の

会員登録をすれば、いろいろな着ボイスがゲットできる

から、みんな会員登録しないと——消すよ？」

エリカ「怖いですが、お姉様！ そのステマは、かえってマイナス

イメージになりませんか？」

ノール「大丈夫。訓練された紳士淑女なら、きっと」

エリカ「でも、上城は職場で『なんですか、コレ？』って聞か

れて返答に窮したらしいですよ」

ノール「修行が足りないんだよ！ もしくは甘いもの食べ過ぎ」

バスメル「すまない、行かなくてはいけなくなっちゃったよ」

ノール「はい、ごきげんよう（棒読み）」

バスメル「では、またあおう！ 恋のビッグ・ウエンズデイ!!」

SE…歩く音 (F・O・)

一拍の間

ノール「木曜なのにね、今日」

エリカ「こまったもんですね」

ノール「それよりも——ボインに、にげられたー!」

エリカ「そもそも変身もできなかったので……」

ノール「にゃんこも、いつの間にかどっか行ったー!」

エリカ「それは、まあ——しかたないですね」

ノール「もおお、いつかリベンジだよ!」

エリカ「そうですね、リベンジです!!」

一拍の間

エリカ (N) 「アンモニアのアンに逃げられ、ノールたちは部屋
へと帰っていった」

エリカ (N) 「消しきれぬ悪臭源を武器に、強敵が復活した」

エリカ (N) 「今までにないしぶとい敵に、果たして勝利できる
のだろうか？」

エリカ (N) 「そして、やっぱりノールとボインの相性はわるい
のだろうか？」

エリカ (N) 「デオファエアリー・ノールの、消臭は終わらない…
…」

一拍の間

エリカ (N) 「漂う悪臭を、なんとする」

エリカ (N) 「芳香剤では、ごまかしきれぬ」

エリカ (N) 「換気扇でも、どうにもならぬ」

エリカ (N) 「マイクログルで、消臭する」

エリカ (N) 「また、来週も……」
ノール (N) 「『デオ・デオドアー!』」

おわり。